

# 太平洋島嶼学特論レポート

教育学研究科 学校臨床系学修コース 修士2年

土元 哲平

## はじめに

私たちは2016年9月4日(日)～9月11日(日)までの期間、ミクロネシア連邦・ウエノ島(2泊)、ピス島(3泊)、グアム(3泊)の日程で滞在した。

ウエノ島はチューク州に属し、州の人口は約5万人(2010年)に対して、その約3分の1が住んでいる。海底にはトラック空襲で沈んだ日本船や軍用機が数多く眠っており、沈船ダイビングのスポットとして人気が高い。<sup>1</sup> 今回宿泊したホテルにも、多くの日本人が宿泊していた。

ピス島はウエノ島より北に約25km離れたところにあり、小型ボートで約1時間の移動時間であった。



船上から見たピス島

## 日本とミクロネシアの生活基盤の差異

ミクロネシアおよびグアムでの8泊9日の間、私がもっとも強く感じたことは、私たちが日本に住んでいて「当たり前」になってしまっている、インフラストラクチャー(以下インフラ)、文化、人間関係は他の国では当たり前が存在するわけではないということである。これは、私にとってカルチャーショックであった。ここでは、特に私が訪れたミクロネシア(ウエノ島、ピス島)と日本との違いについて、その場で観察したこと、素朴に感じたことを述べていきたい。

水道・ガス・電気といったものは、私たち日本人の生活基盤である。これらのものが十分に整備されていない場所での生活は、研修前には想像することもできなかった。しかし、実際にその場に



井戸水をくみ上げる様子

---

<sup>1</sup> チューク政府観光局 観光案内(Official Guide Book by Chuuk Visitors Bureau)より。

行ってみると、「意外となんとかなる」ものである。ピス島では、飲み水にはミネラルウォーターを用いるが、洗濯や体を洗うための水には、井戸水を利用する。井戸水といっても、雨水を溜めたものである。電気はジェネレーターを使って電気を点けることもできるが、普段は使わない。ガスはカセットガスを使用していた。ウエノ島においては、ホテルには水道があったが、飲めるほどきれいなものではなく、客室内には別途ミネラルウォーターのタンクが設置されていた。また、空港のトイレの水道が壊れていて使えないというトラブルもあった。ここではコンセントも用意されており、電気は供給されている。日本では、各家庭に当たり前のように水道や電気、ガスが整備されている。水道は水が出るのが普通だし、蛇口から出る水は透明で飲むこともできる。電気は日々安定して動かしているし、パソコン、スマートフォンなどを使う余裕もある。ガスも、ある日突然使えなくなったりすることはほとんどない。

ここで私はピス島とウエノ島という、同じ国内においてもインフラにおける大きな格差が存在することに驚いた。また、日本での環境がいかに恵まれたものであるかを実感することとなった。

次に、道路について、ウエノ島では道路が島の半分程度しか舗装されておらず、でこぼこ道を上下に揺れながら移動することが普通である。さらに、もっともよく使われている空港からホテルまでの道は舗装がされていない部分が多いが、逆に人気のあまりない道路の方がよく舗装されているという状況もみられ、利用者のニーズへの対応が十分かどうか、疑問に感じられた。



舗装されている道路（左）と、未舗装の道路（右）

## ピス島における学校の現状と「学び」について

広い意味での「インフラ」ということでいえば、学校もひとつの社会的基盤である。研修中に、ピス島の小学校を訪問したが、そこでは小学校の先生（A教諭とする）から話を聴く機会に恵まれた。A教諭のお話しによれば、その困難の一つは、学年の違う子どもへの教育、特に教材不足を原因とするものであるという。ある学年の生徒に教えている間、違う学年の生徒に自習させるよう

な教材がないということだった。お話しを聴く直前までも、A 教諭は英語教育のために、生徒がなぞるための点線で書かれたアルファベットを手書きで作成していた。この作業が夜中まで掛かるということで、A 教諭自身の負担も大きく「コンピュータがあれば」と、苦心している様子だった。コンピュータ・プリンターを用意するためにはいくらかの財源が必要であるし、仮に手に入れたとしても、使うためには電力が必要である。電気が供給されていないという問題はその点にも関わってくる。それでは電気が整備されればよいかといえ、これもまた困難である。ピス島にはかつて水道が整備されたことがあったというが、それは施設の老朽化と修理する人材の不足によって使われなくなった過去がある。たとえ国がそうした生活基盤を一斉に提供しても、その設備が維持されなくては意味がない。このことはコンピュータについても同様である。コンピュータを操作可能な人材が、教師に技術を伝え、それが持続可能な形で伝達されていく必要がある。この一つの例をとって考えても、ピス島の教育現場における困難は単純なものではない。こうした教育的な資源の困難は、問題の大小を除けば、鹿児島県の離島教育にも通ずる問題ではないだろうか。

さて、この島での教育をどう捉えていくかという時には、学校という場での「学び」の捉え方自体を再考しなくてはならない。学校の学びと、日常での自然な学びとの大きな違いは、学びの場が意図的に用意されている点である。その題材としての「教科」である数学や理科のような科目を教える目的のひとつは、実際に使えるかだけでなく、その授業での教師との対話を通して、「ものの見方・考え方」を育むことである。英語は比較的、実学的な側面が強いが、同様にコミュニケーション能力や、文化や言語への理解を育むといった目的もある。それらの能力を日常生活の場だけでは育むことが難しいため、学校という制度として子どもたちに教育していこうというものである。私は現在、ある学校で非常勤講師として勤務しているが、実学的な内容を教える際に、いかに「ものの捉え方」を育むかという点で苦心している。今回 A 教諭から学んだ経験を生かし、今後向き合っていきたいテーマである。



小学校の教室で A 教諭の話聴く



使われなくなった水道

## カルチャーショックを通じた「私」との対話

今回のミクロネシアでのカルチャーショックという経験を通して、私はどのように学び、そしてそれがどのような教育的な可能性があるのかという点について考えたい。

ハーマンスの対話的自己論によれば、自己の世界には、客体としての「私 (Me)」と主体としての「私 (I)」が存在すると言われる。「客体としての私」は、その人自身や、関係する他者、ものを含んでいる。たとえば、「優しい母親」「友人の A 君」「日本人としての私」「よく聴く音楽」「お気に入りのカバン」「鹿児島県民としての私」「大学院生としての私」といったものである。「主体としての私」は、小説の著者がさまざまな登場人物の立場をとるように、その場その場により私 (Me) を主体化し、それぞれのポジション (I ポジション) として自己を語るのである。二つ以上の I ポジションをとって対話させることで、私 (Me) 同士が相対化され、自己の統合 (integration) や総合 (synthesis) につながることもあるという。<sup>2</sup>

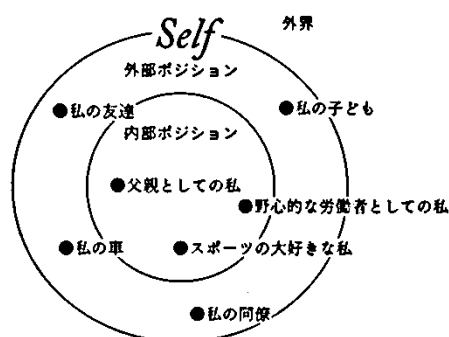


図 6-2-1 対話的自己におけるさまざまな I ポジション  
Hermans & Hermans-Jansen (2003, p. 544, Figure 23.1) をもとに作成。  
Me のうち「私」は内部ポジションに、「他者」は外部ポジションに配置されている。

出典：『自己の心理学を学ぶ人のために』 p. 205  
(注 2 参照)

私は研修中において何度か、日本との文化的な違いを感じるがあった。例えばピス島の人達がモノを共有する文化があることである。食べ物、アルコール、嗜好品といったものを、ピス島ではその場の何人かで共有し、それによって人間関係が成り立っている文化がある。日本では個人主義が強く、同様の共有の文化が見られることは少ない。私にとって、これがひとつのカルチャーショックであった。このような異文化と出会った時、私は自然と「日本ではなかなかしないけれど、ピス島ではこれが普通なんだ」と考えていた。これが、私が研修中によく遭遇した、自己内での対話である。

このとき、「日本人としての私」のポジションと、「ピス島の人々の文化」のポジションとの対話を行っていたと理解することができる。「日本人の私としてはこういうことはあまりしないけれど、ピス島の人々の文化ではよくあることだ」ということである。この2つのポジションからの対話は、「ピス島の人々」という他者の視点 (外部ポジション) から「日本人としての私」 (内部

<sup>2</sup>梶田・溝上編 (2012) 『自己の心理学を学ぶ人のために』 pp.203-207 を参考

ポジション)を相対化したことになる。「ピス島の人々」というレンズを通して、日本の文化の中にいけば意識しないようなこと、たとえば、インフラストラクチャー、食文化、人間関係、教育といったものを、これまでと異なる視点から見ることができたのである。

## 海外研修の教育的意義

「日本人としての私」は、普段なかなか意識することはないし、「ピス島の文化」もこの研修で初めて出会った新たな私 (Me) であった。共に研修を行った友人も「こんな一面もあったのか」と、関係性が変化していった。ピス島やグアムで出会った人々も、新しい出会いだった。このような、普段は意識しない「私」、新しい「私」(自己の中にいる他者も含んだ「私」である)の視点が生まれることにはどのような教育的意義があるのだろうか。

日常生活の中で、自宅で本を読む、友人と過ごす、大学院の講義を受ける、というようなルーティン化された関係性の中では、語る「私」も固定化されたものになってしまうと考えられる。固定された関係の中では、「私」を見るレンズも固定化されてしまい、自己を捉える枠組みが狭くなってしまう。このような関係性を積極的に変化させていくことで、新たな自己の側面や、今までの「私」が持っていた固定観念に気付くことができる。しかし、馴染んでいた生活から抜け出し、新しい人との関わりを作ることは、これまでの自己を変えることであり、これを自律的に行うことは、非常に難しい。なんらかの「転機」となるような出来事がなければ難しいものである。

そこで、海外研修はその転機となるような一つの出来事として捉えることができる。普段わたしたちは「日本人」というアイデンティティをどこかで持っていながらも、それを意識化することは少ない。海外に出たとき、改めて意識する「日本人」というレンズは、「新しい私」として捉えてもいいほど新鮮なものである。また、それと同時に「現地の人々」という新たな「私」も生まれてくる。今回は、専門的な知識を持った山本教授やグアムでのイノウエ教授、そして友人との関わりの中で、単なる「海外旅行」では得ることのできない「私への気付き」を得ることができた。

そうした新しい私への気付きが契機となって、私自身、もっと様々な角度から「私」を理解したいというパワーが生まれてきた。海外研修という題材を通して私自身も自己理解が深まったように思われる。ミクロネシア・グアムでの研修はその現地の人々の視点と、日本人の私としての視点から、自己理解をより深めるための契機になるという点で教育的意義があると考えられる。